

命は必ず平等である

(原文)

七夕 菜々子 (15 歳)

鹿児島県

鹿児島市立鹿児島玉龍中学校・高等学校

私は正直、叔父が苦手だった。会うと、必ず変なことを言ってきたり、皆で話しているのに急に大声で歌いだしたり……。やめると言ってもやめてくれない叔父に嫌気がさしていた。しかし、今では私の大切に大好きな叔父である。

私は最近、ニュースで「いじめによる自殺」という文字を何度か見かけた。専門家らが、「なぜ学校はいじめに気づかなかったのか」と、第三者を責める争論をしていた。しかし、私がいじめを覚えたのは「なぜいじめをしたのか」という、ただそれだけだった。確かに、学校が気づけば何か変わったかもしれない。しかし、最も争論すべきは、「いじめの当事者をどう減らすか」ではないか。

文部科学省によると、2019 年度のいじめ認知件数は約 61 万件。こんなにも多くの子供たちがつらい思いをしているという現状に心が傷む。その中でも約 300 人もの子供が自殺をしてしまった。年々増えているいじめを、なんとしても止めなければならない。

私は、いじめが起こる原因として、他人のいいところを知らないこと、そして日常に「幸せ」を見つけれないことだと考える。

私が叔父を好きになったきっかけは、母から叔父の昔話を聞いたからである。実は叔父は精神疾患をもっている。今は、薬を飲み続け、落ち着いてはいるが、昔はすごく大変で、つらい時期もあったそうだ。叔父が小学生の時、背中にたくさんの傷をつけて帰ってきた。障害がある、という理由だけで避けられ、いじめに発展したという。その後、お風呂で祖父に背中をさすられ、一緒に一晩中泣いていたそうだ。私はその話を聞いたとき、何も言えず、ただ眉間にしわを寄せていた。そして、母は、こういう話を続けた。叔父はすごく動物が好きなのは、親戚皆知っている。「昔、お母さんと弟で歩いていたら、車にひかれて、残酷な姿で死んでる猫を見たの。お母さんは怖くて逃げたんだけど、弟はしゃがんで一歩も動かなかった。家に帰って聞いてみたら猫ちゃんのお墓を作ってたって。あんな風にななちゃんたちに接するけど、実は本当は優しいんだよね。」そう聞いたとき、私は下を向いていた。私は叔父をいじめた人たちと同じ考え方しかできていなかった。ただイライラするという理由で、叔父を嫌っていた。私は一晩中自分を責め、そして、相手のいいところを見つけることを、人生の柱にした。

そして、私の人生の柱にはもう一つある。「日常に『幸せ』を見つけること。」いじめをする人は、日常に満足できない、「幸せ」を知らないのだと思う。平気で人の幸せを奪えるからだ。私は特殊な特技

がある。例えば、どんなに相手に怒ったとしても、相手が家族の話をしている、また家族と笑顔で話しているのを見ると、つい、怒りが消えてしまう。それはおそらく、私が家族からたくさんの愛をうけ、それを幸せと感じているからだろう。

私はこの作文を通して、生きていく上で、全ての人に大切にしてほしいことを伝えたい。人が一つの命を全うすることの素晴らしさを、最近身をもって感じる。公正・公平を掲げている今の世の中は、まだまだそこまで至っていない。しかし、どの国でもどの時代でも、一つの命の重さだけは常に平等だ。決して他人の命、人生を奪うことなどしてはいけない。そして、自分の人生に強引に終止符を打つことも絶対にしてはいけない。どこにも幸せがなくても、自分の未来には必ず持っている。

私の夢は「外国で、いろいろな価値観をもつ人たちと共存すること」だ。違う国籍、違う文化、違う体、違う悩み……。いろいろな人と会い、その人を知り、たくさんの経験を積んで、様々な角度から身の回りの問題について探求できる人になりたい。

まずは身近な叔父を知る。私もイライラさせるほど話かけ、一緒になって歌って、叔父の日常の一つの幸せになりたい。